

國學院大學學術情報リポジトリ

A Study on a Participial Adjective-sa in Genji Monogatari-Concerning a Description in Tamano Ogushi

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三宅, 清 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000956

源氏物語における「連体形—サ」について —「玉の小櫛」の記述をめぐって—

三宅 清

キーワード：源氏物語 玉の小櫛 連体形—サ 連体形ガーキ 準体句

1 はじめに

源氏物語に次のような表現がある。

1 いはけなき人をいかにと思ひやりつつ、諸共にはぐくまぬおほつかなきを、
今はなほ、昔の形見になずらへてものし給へ。(桐壺13・2)

下線部は「はぐくまぬ」という連体形に、形容詞「おほつかなし」の語幹 + 接尾辞「さ」が接続している表現である。以下、活用語の連体形に形容詞、形容動詞の語幹 + 接尾辞「さ」が接続している表現を「連体形—サ」と呼ぶ¹⁾。この表現について、本居宣長「源氏物語玉の小櫛」に次のような記述がある。

これは諸共にはぐくまぬがおほつかなきをと有けんを、が文字を落し、
きをさに誤れるなるべし、(本居宣長全集第四巻・筑摩書房 p 322)

要するに、用例1の箇所に対して、宣長は、「諸共にはぐくまぬがおほつかなき」の誤り、すなわち、連体形 + 助詞「が」 + 形容詞「おほつかなし」の連体形「おほつかなき」という構成の準体句が正しいと述べている。以下、宣長が正しいとしている、活用語の連体形が助詞「が」を介し、形容詞連体形に連なる構成の準体句を「連体形ガーキ」と呼ぶ。

筆者は、三宅清(1986)で、主に源氏の連体形—サについて考察を加えた。そこでは、連体形ガーキについてはほとんど触れなかった。そこで、本稿では、主として源氏の連体形—サと連体形ガーキを比較することにより、玉の小櫛の記述の妥当性を探る。

2 連体形一サについて

連体形一サは、源氏において、153例みられる²⁾。

源氏において、形容詞、形容動詞の語幹に接尾辞「さ」が接続している例(以下「一サ」と呼ぶ)は530例を数える。一サ³⁾の中で連体形一サの占める割合は、28.9%である。

また、連体形一サの、連体形と一サに助詞「が」を介した、いわば連体形一サの分析的な表現として、次のような表現がみられる。

2 とてもかくても頼もしき人々に後れ給へるがいみじさ、と思ふに、(若紫 191・6)

用例2のような表現を「連体形ガーサ」と呼ぶ⁴⁾。

連体形ガーサは、源氏に17例存する。量的には、連体形一サの方が圧倒的に多い。

次に連体形一サの特徴をより明確にするため、連体形ガーサと、質的な面から比較する。

①文の種類②修飾の種類③下接形式の異なり数の三点から比較を行う。

①文の種類

連体形一サは、地の文56例、会話文60例、心内文28例、草子地5例、消息文4例である。それに対し、連体形ガーサは地の文3例、会話文11例、心内文2例、歌1例である。

連体形一サは様々な文で用いられているのに対し、連体形ガーサは会話文に偏っている。心内文、歌も会話文に準じると捉えると、その傾向はさらに顕著になる。

②修飾の種類

連体形一サは、言うまでもなく連体形が修飾句、一サが被修飾句の連体修飾句である。

3 御髪のかかりたる様、限りなき句はしさなど、ただかの対の姫君に違ふ所なし。(賢木351・8)

4 身のおほえまさるにつけても、思ふ事のかなはぬ憂はしさを思ひ侘びて、

この宮の御姉の二の宮をなむ得奉りてける。(若菜下1172・3)

用例3のように、被修飾句が修飾句に対して格関係に立つ場合〔(藤壺の) 匂はしさが限りなき〕を「内の関係」、用例4のように、格関係に立たない場合を「外の関係」という⁵⁾。用例4は、〔(柏木が) 声望が増すにつけて、(思う事が) かなはぬ<コト>憂はしさを〕という関係であり、「憂はしさが」〔(思ふ事の) かなはぬ〕という格関係ではない。以下、用例5～9は内の関係、10～14は外の関係の例である。

5あやしう人に似ぬ心強さ〔心強さが(人に)似ぬ〕にてもふり離れぬるかな、(夕顔145・12)

6憂き身からは、同じ嘆かしさ〔嘆かしさが同じ〕にこそ。(滯標497・3)

7大将の君も、御位の程思ふこそ、例ならぬ乱りがはしさ〔乱りがはしさが例ならぬ〕かなとおぼゆれ、(若菜上1113・5)

8仏などのすすめ給ひける身を、心強く過して、終に來し方行く先も例あらじとおぼゆる悲しさ〔悲しさが(例あらじと)おぼゆる〕を見つるかな。(御法1395・6)

9かの形見に、飽かぬ悲しさ〔悲しさが飽かぬ〕をも宣ひ出づべき人さへなきを、対の御方ばかりこそは、あはれなど宣へど、(蜻蛉1974・5)

10逢ひ見て過さむいぶせさの、堪へがたう悲しければ、(松風582・14)

11何事をも思し知りたる御齡なれば、とぎまかうざまに思し集めつつ、母君のおはせずなりにける口惜しさも、また取り返し惜しく悲しくおぼゆ。(螢805・8)

12故権大納言のはかなく亡せ給ひにし悲しさを、飽かず口惜しきものに、恋ひ偲び給ふ人多かり。(横笛1269・1)

13心ばかりは蓮の上に思ひのぼり、濁りなき池にも住みぬべきを、いとかくをさなき人々を見捨てむ後ろめたさばかりになむ、えひたみちにかたちをも変へぬ。(橋姫1514・9)

14かくてこそありけれと聞きつけられ奉らむ恥かしさは、人よりまさりぬべし。(手習2025・8)

連体形一サにおいて、内の関係は56例、外の関係は97例である。それに対

し、連体形ガーサは、連体形の部分と一サの部分との関係を見ると、17例すべて外の関係に偏っている。

15さてうち捨てられ奉りなむがうれはしさを、各々うち出でまほしけれど、
(幻1406・12)

16何事も飽かぬ事はあらじとおぼゆる身の程に、さはた後の世をさへたどり
知り給ふらむがありがたさ。(橋姫1517・9)

17人笑へに見苦しき事添ひて、見扱はれ奉らむがいみじさを、よろづに思ひ
居給へり。(総角1622・8)

③下接形式の異なり数

本稿でいう下接形式とは、助詞、助動詞、またはそれらの複合したもので、語ではなく形式と呼ぶ。

連体形一サに下接する形式は次の25形式である⁶⁾。

かな こそ ぞ ぞかし と とは など ななり なめり なむ なり
に にて には にも にか の のみ は も よ よりも を をば
ナシ

ナシというのは、次のような例である。

18書い給へる言の葉、げにその折よりもせきあへぬ悲しさ、やらむ方なし。
(幻1421・13)

下線部「せきあへぬ悲しさ」は、下接形式を伴わず、「やらむ方なし」に係っている。

一方、連体形ガーサに下接する形式は5形式に過ぎない。

なり にも を ナシ

用例数の違いがあり、連体形ガーサに下接する形式が少ないのは当然ともいえるが、連体形一サが、より幅広い形式を伴って、様々な成分になっていることがわかる。また、語幹となる形容詞、形容動詞⁷⁾の異なり語数は、連体形一サが82、連体形ガーサが13である。

以上のように、連体形一サは、量的にも質的にも幅広く用いられている。

また、源氏の諸本を調べると⁸⁾、連体形一サが連体形ガーサになっている本が存する例は、153例中5例なのに対して、連体形ガーサが連体形一サに

なっている本が存する例は、17例中8例である。連体形一サの方が連体形ガ一サより安定した表現といえる。

連体形一サは、源氏以前の作品⁹⁾では、万葉集0例、竹取物語0例、古今和歌集0例、伊勢物語0例、土佐日記1例、後撰和歌集1例、蜻蛉日記2例、宇津保物語7例、枕草子2例と、源氏に特徴的な表現といえる¹⁰⁾。

19桂川我が心にも通はねど同じ深さに流るべらなり（土佐32・4）

20ありしだに憂かりしものをあかずとて何処に添ふるつらさなるらむ（後撰和歌集952番歌）

21急ぎ見えし世々もありしものを、まして成り果てにけるあさましきかな。
（蜻蛉188・11）

22この内侍の督の家、昔見給へしゆかしさに参うで来て（宇津保楼上下525・8）

23宮司などは耳とどめて聞きけるに、久しうなりげなるかたはらいたさに、ことかたより入りて、女房のもとに寄りて、（枕草子117・8）

3 連体形ガーキについて

3・1 連体形ガーキのふるまい

連体形ガーキは源氏において、50例みられる。形容詞連体形による準体句（以下、一キと呼ぶ）は1160例あり、連体形ガーキは4.3%と少ない。連体形ガーキ、一キの用例を5例ずつ挙例する（用例24～28が連体形ガーキ、29～33が一キ）。

24うち腫れたるまみも、人に見えむが恥かしきに、宮はた召しまつはすべかめれば、心やすき所にとて、急ぎ出で給ふなりけり。（少女694・7）

25いと多かめる列に離れたらむ後るる雁を、強ひて尋ね給ふがふくつけきぞ（常夏830・9）

26同じ縁に珍しげなくとも、この中納言を余所人に譲らむが口惜しきに、さもやなしてまし、年頃人知れぬものに思ひけむ人をもなくなして、もの心細く眺め居給ふなるをなど思し寄りて、（早蕨1691・11）

27「いとうつくしく生ひ出で給ふが悲しき」などとぞ中頃は文にさへ書き続

けて待めりしか、と聞ゆ。(宿木1763・3)

28ここに置きて、え思ふままにも来ざらむ事を思すが今より苦しきは、な
めには思さぬなるべし。(東屋1852・2)

29笑み給へる薫うつくしきは、女にて見奉らまほしう清らなり。(賢木355・
13)

30隔たり多くあやしきが、現の心地もし給はねば、まほならずもてなし給へ
るもいとをかし。(初音767・3)

31女宮も、かかる気色のすさまじげさも見知られ給へば、何事とは知り給は
ねど、恥かしくめざましきに、もの思はしくぞ思されける。(若菜下1183・
4)

32入方の月、隈なくさし入りて、透影なまめかしきに、君達も奥まりておは
す。(椎本1556・7)

33昔より隔てなくてあやしきまでしるべし率て歩き奉りし道にしも、後ろめ
たく思し寄るべしやと思ふに、いと心づきなし。(浮舟1909・3)

連体形ガーキが用いられている文の種類は、地の文16例、会話文23例、心
内文9例、草子地1例、消息文1例である。源氏以前の作品をみると、連体
形ガーキは、万葉集1例、竹取0例、古今集0例、伊勢0例、土佐0例、後
撰集1例、蜻蛉2例、宇津保17例、枕草子10例である。蜻蛉は、2例とも会
話である。宇津保は地の文では用いられず、会話文が11例、心内文2例であ
り、歌も4例ある。枕草子は地の文が9例、会話文が1例で、源氏の連体形
ガーキが大きな偏りなく用いられていることがわかる。

次に挙げるように、源氏において、連体形ガーキの下接形式の異なり数は、
8形式みられる

こと¹¹⁾ さ ぞ ナシ なめり なり に を

他の作品では、宇津保が4、枕草子5、蜻蛉1形式である。

宇津保 こと ナシ に は

枕草子 こそ ぞ なり に を

蜻蛉 こと

また、連体形ガーキの準体句を構成する形容詞の異なり語数は源氏が35、

宇津保が11、枕草子が6である。

源氏が他作品に比べれば、比較的幅広く用いられているといえるが、前述の源氏における連体形一サの下接形式25と比較すると、限定的である。

諸本間の異同をみると、連体形ガーキが連体形一サになっている本が存する例は5例、連体形ガーサになっている本が存する例は2例である¹²⁾。

3・2 連用成分との関わり

連体形ガーキの一キは、準体句、すなわち名詞句である。しかしながら、連体形ガーキには、連用成分が接続する例がみられる。単体として最も多い連用成分は副詞「いと」である（用例34～41の8例）。

34今までとまり侍るがいと憂きを、(桐壺12・3)

35人をいたづらになしつるかこと負ひぬべきがいと辛きなり。(夕顔132・3)

36鈍色の細やかなるが、うち萎えたるどもを着て、何心なくうち笑みなどして居給へるがいとうつくしきに、我もうち笑まれて見給ふ。(若紫192・13)

37見奉り置かむがいと心苦しきを、(蓬生526・14)

38公茂が仕うまつれるがいといみじきを奉らせ給へり。(絵合567・13)

39かく今は限りの様なめるを、年頃の本意ありて思ひつる事、かかるきざみに、その思ひ違へて止みなむがいといとほしき。(御法1390・13)

40さて、ここに時々物するにつけても、かひなき事の安からずおぼゆるがいと益なきを、この寝殿毀ちて、かの山寺の傍らに堂建てむとなむ思ふを、同じくは疾く始めてむ(宿木1759・3)

41幼き子どもの事まで仰せられたるがいともかしこきに、まだ数ならぬ程は、なかなかいと恥かしう。(蜻蛉1959・10)

源氏の一キをみると、様々な連用成分が一キに接続している。

42君は、深うしも思はぬ事の、かう情なきを、すさまじく思ひなり給ひにしかど、(末摘花208・5)

43げにうち解け給へる様、世になく、所からまいてゆゆしきまで見え給ふ。(夕顔121・3)

44この若草の生ひ出でむ程のなほゆかしきを、似げない程と思へりしも、こ

とわりぞかし。(若紫171・8)

45分け入り給ふ程、いとど露けきに、月も隠れて、森の木立木深く心すごし。

(須磨409・13)

46もとより思ひ離れたる人々は、なかなか心安きを。(若菜上1061・11)

47女はこの人の思ふらむ事さへ死ぬばかりわりなきに、(帚木70・1)

48なよよかなる御衣どもをいとど匂はし添へ給へるは、あまりおどろおどろしきまであるに、丁子染の扇のもてならし給へる移香などさへ、譬へむ方なくめでたし。(宿木1736・1)

49こはいかにもてなし給ふぞと夢のやうにあさましきに、後の世の例に言ひ出づる人もあらば、昔物語などに、をこめきて作り出でたる、物のたとひにこそはなりぬかめれ。(総角1618・2)

50宮の御方は、今少し今めかしきものから、心許さざらむ人の為には、はしたなくもてなし給ひつべくこそものし給ふめるを、(宿木1761・13)

51今は限りと思ひ侍る命の、さすがに悲しきを、「あはれと思ふ」とばかりだに一言宣はせば、(竹河1484・9)

上掲のような一キに接続する連用成分の中で、最も多いのが「いと」である。

52この大臣の御おぼえ、いとやむごとなきに、(桐壺26・12)

53 心いる方ならませば弓張の月なき空に迷はましやは

といふ声、ただそれなり。いとうれしきものから。(花宴278・13)

54今かしこに渡し奉りてむ。宮の御心のいとつらきなり。(少女685・6)

55言葉たみて、我がままに誇りならひたる、乳母の懐にならひたる様に、もてなしいとあやしきに、やつるるなりけり。(常夏847・6)

56この宮のいと騒がしきまで色におはしますなれば、心ばせあらむ若き人さぶらひにくげになむ。(浮舟1903・9)

「いと」は、一キ1160例中106例(9.1%)に接続している。連体形が一キは、もちろん一キの一用法であるので、この一キの「いと」の多さの反映かと思われるが、他の作品をみると、必ずしもそうはいえない。

一キに「いと」が接続している例は、竹取6例中0例、伊勢18例中2例(11.

1%)、土佐12例中0例、蜻蛉90例中14例(15.6%)、宇津保369例中45例(12.2%)、枕草子236例中38例(16.1%)みられる。その割合は、源氏より多い。しかしながら、連体形ガーキに「いと」が接続する例は、宇津保に1例、枕草子に1例あるのみで、伊勢、蜻蛉にはみられない。

57さる心もなくにはかなる事なれば、えなでふ事なからむがいといとほしきこと。(宇津保初秋212・5)

58冬の夜などひき探し探しのほりぬるがいとわびしきなり。(枕草子231・10)

3・1で述べたように、連体形ガーキは源氏に特徴的な表現といえるが、その中でも、「いと」が接続している例が特に源氏に特徴的といえる。

このように、準体句は名詞句でありながら、用言性も兼ね備えていると考えられる。

なお、「いと」との関連でいうと、一サに「いと」が接続している例¹³⁾が源氏には4例みられる。

59小君、いといとほしきに、ねぶたくもあらで惑ひ歩くを、(帚木78・7)

60いと今めかしきも、見ならばなりにける事なれば、いとなむ苦しき。(夕霧1332・11)

61夜の程にて立ち帰り給はむもなかなかなるべければ、ここの人目もいとつつましきに、時方にたばからせ給ひて、(浮舟1891・6)

62いとおぼつかなさにまどろまれ侍らぬにや、(蜻蛉1931・7)

蜻蛉にも2例みられる。

63あさましと思ふに、うらもなくたはぶるれば、いとねたきに、ここの月頃念じつる事を言ふに、(蜻蛉131・2)

64おりたちてわびいたれば、いとなつかしきに、(蜻蛉219・11)

また、源氏には次のように、一キに連体詞「この」が接続している例もある¹⁴⁾。

65この心もとなきも、疑ひ添ふべければ、いづれと終に思ひ定めずなりぬるこそ世の中や。(帚木58・6)

宇津保にも1例みられる。

66それ、去年の冬、はかなき人に物言ひ触れて侍りとて罷り去りて、親の許

に侍りければ、この幼きを取り持てなむ、(宇津保国譲下240・14)

枕草子には次ような例もある。

67同じ若きなれど、押し上げたる人は、えまじらで、うらやましげに見上げたるもいとをかし。(204・10)

準体句の複雑な性格¹⁵⁾を表しているといえるが、今後の課題としたい。

4 おわりに

以上、述べてきたように、玉の小櫛の記述に関わらせて問題提起した、連体形一サと連体形ガーキの両表現は、どちらも源氏に特徴的な表現といえる。しかしながら、源氏においては、用例数を単純に比較しても連体形一サの方が連体形ガーキよりも多いが、各々、一サ、一キの中での割合を比べても、前述のように28.9%対4.3%と、連体形一サの方が量的に圧倒的に多い。また、下接形式についても、連体形一サの方が、連体形ガーキよりも広範に用いられている。したがって、必ずしも連体形一サが、玉の小櫛の記述のように、連体形ガーキの誤りということとはできないのではないか。

注

- 1) 今泉忠義(1977) 森 昇一(1980)に言及がある。また、現代語でも、「試合に負けた悔しさ」のように使われている。
- 2) 「程もなき軒の近さ」のような連体形と一サの間に「の」による連体修飾句を介している例は除いた。
また、語幹となる形容詞、形容動詞は、『日本国語大辞典』(小学館)の見出しとして載っている語に限る。
- 3) 一サについては、柳田征司(1977) 青木博史(2003) 竹内史郎(2005)が、古代語の主₁にサニという形式について触れている。古典語の一サについては秋本守英(1983)(1996)、特に源氏の一サについては、本廣陽子(2004)に詳しい。また、現代語の一サについては影山太郎(1993)に詳しい。
- 4) 連体形ガーサについては、接尾辞サが上接する句全体を包摂しているという立場(時枝誠記(1954) 阪倉篤義(1966))と、サはあくまでも形容詞の語幹のみを名詞化したものという立場(竹内史郎(2005))がある。
- 5) 寺村秀夫(1975)の分類に従う。他に、奥津敬一郎(1974)は「同一名詞連体修飾」と

- 「付加名詞連体修飾」林 四郎（1975）は「注ぎ」と「括り」と分類している。また、小田 勝（2015）では、古代語における例を分析している。
- 6) 『日本国語大辞典』の見出しとして扱われている形式に限る。
 - 7) 語幹となる形容動詞は、「あてなり」「苦しげなり」「はなやかなり」「まめやかなり」（各1例）「らうたげなり」（2例）の6例である。
 - 8) 『源氏物語大成校異篇』に拠る。
 - 9) 各作品の成立年は、『日本語学大辞典』（2019・東京堂出版）の「日本語年表」に拠る。
 - 10) 源氏以前の作品における連体形ガーサは、万葉集18例、竹取0例、古今集1例、伊勢0例、土佐2例、後撰集3例、蜻蛉3例、宇津保13例、枕草子1例である。
 - 11) 「こと」は次例のような、文末にあって感動を表す終助詞的な「こと」である。

・故宮のいとやむごとなく思し、時めかし給ひしものを、軽々しうおしなべたる様にもてなすなるがいとほしきこと。(葵283・14)
 - 12) 「さ」と「き」との字体の近似性も考慮しなければならない。
 - 13) 竹内史郎（2005）に指摘がある。諸本間の異同をみると、用例60は「いませかしく」59、61、62は各々「いとほしき」「つつましき」「おほづかなき」となっている本文もある。
 - 14) 「こころもとな^き」となっている本文はない。
 - 15) 三宅 清（1985）で取り上げた次のような例も、準体句の一用法と考えられる。

・あやしき事なれど、幼き御後見に思すべく聞え給ひてむや。(若紫162・1)

下線部は、形態的には連体修飾だが、意味は幼き[方の]御後見（世話役）である。筆者は、これを特殊な連体修飾としたが、「幼き」という人の意味を表す準体句が、さらに「御後見」という名詞に係っていると解釈される。

使用テキスト

源氏物語・・・源氏物語大成校異篇（中央公論社）

宇津保物語・・・日本古典文学大系（岩波書店）

万葉集 竹取物語 伊勢物語 土佐日記 蜻蛉日記 枕草子 古今和歌集
後撰和歌集・・・新日本古典文学大系（岩波書店）

用例後の（ ）は頁数・行数を表す。表記は適宜改めた。

参考文献

- 青木博史 (2003) 「「～サニ」構文の史的展開」『日本語文法』 3巻1号
- 秋本守英 (1983) 「接尾語「さ」の構文的機能の変遷」『表現研究』 38号
- (1996) 『仮名文章表現史の研究』 思文閣出版
- 今泉忠義 (1977) 『源氏物語語法篇』 桜楓社
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』 大修館書店
- 小田 勝 (2015) 『実例詳解古典文法総覧』 和泉書院
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 阪倉篤義 (1966) 「接尾語の位置」『国語国文』 第35巻第5号
- 竹内史郎 (2005) 「サニ構文の成立・展開と助詞サニについて」『日本語の研究』 第1巻1号
- 寺村秀夫 (1975) 「連体修飾のシンタクスと意味—その1—」『日本語・日本文化』 第4号
- 時枝誠記 (1954) 『日本文法文語篇』 岩波書店
- 林 四郎 (1975) 「修飾における注ぎと括り」『国語と国文学』 第52巻第12号
- 三宅 清 (1985) 「特殊な連体修飾について—源氏物語を資料として—」『国学院雑誌』 第86巻第4号
- (1986) 「「連体形—さ」と「連体形が—さ」」『国学院雑誌』 第87巻第5号
- 本廣陽子 (2004) 「源氏物語の文体の一特質—形容詞の語幹+接尾語「さ」—」『文学』 第5巻第4号岩波書店
- 森 昇一 (1980) 「源氏物語における主語・述語構文の一形式」『日本文学論究』 第40冊
- 柳田征司 (1977) 「原因・理由を表わす「～サニ」の成立と衰退—「史記抄」を資料として—」『近代語研究』 第5集武蔵野書店